B-1

複文におけるフレームの重ね合わせ

—「～が引き金になって」などの例を中心に—

氏家啓吾（東京大学大学院）
keigo5525@gmail.com

要旨　従属節と主節の間の意味的関係は接続形式によって表されることが多い。しかし「死球が引き金になって、両チーム入り乱れての乱闘が起こった」という文では、むしろ名詞「引き金」の意味内容が文の理解に決定的な役割を果たしている。本発表では「X が Y になって…」という構文を、言語表現の喚起する百科事典的知識のまとまりすなわちフレームの観点から考察する。この構文は Y の位置の名詞が喚起するフレームをもとにして、その中の 1 つの要素に X の表す事物が重ね合わされ、別の要素に主節の内容が重ね合わされるという形で文全体の意味が統合される名詞主導の複文スキーマであると主張する。また具体例の検討を通して、構文自体が「X によって何が起こったか」を述べるというスキーマとしての意味を担っていることが明らかになる。

1. はじめに

言語表現の意味の理解には、その背後にある百科事典的知識が不可欠である。本発表では、日本語の次のような文の考察を通して、複文の意味の統合におけるフレームの関わりを論じる。

(1) a. 死球が引き金になって、両チーム入り乱れての乱闘が起こった。
　　b. 精神的ストレスが原因となって、蕁麻疹が出た。

この種の文は、テ形従属節の一種として見た場合、やや特殊な意味的関係を含んでいる。テ形従属節の表す関係はおおむね〈継起〉〈原因〉〈理由〉〈付帯状況〉〈並列〉などに分類されることが多い（仁田 1995 他）。一見したところ、上の例は〈原因〉の関係に該当するように見えるかもしれない。たしかに、次のような〈原因〉タイプの例と同種の関係が表現されている。

(2) 冷たい物を食べ過ぎて、腹を壊した。　（仁田 1995: 106）

この場合、従属節の事象が主節の事象の原因であると言える。しかし、例えば (1b) の従属節は「精神的ストレスが原因となって」であることに注意しよう。蕁麻疹の原因でありうるのはストレスであって、「精神的ストレスが原因となる」ことではない。したがってここでの従属節の事象と主節の事象との間の関係は〈原因〉の関係とは言えない[1]。このことは〈原因〉関係を明示する「ために」を用いた言い換えが不可能であることにも反映されている。

(3) a. 冷たい物を食べ過ぎたために、腹を壊した。
　　b. *精神的ストレスが原因となったために、蕁麻疹が出た。

(1) の構文について 3 つのことが指摘できる。第一に、従属節の事象と主節の事象は別の 2 つの事象ではない。蕁麻疹が起きたことによってはじめて「精神的ストレス」がその原因とみなされるという概念上

[1] あえてテ形従属節の分類に当てはめるならば、〈付帯状況〉と呼ばれるタイプに該当するだろう。付帯状況節については三宅（1995）に詳しい。ただし付帯状況のテ形従属節の例に典型的に見られる主語の共有は見られない。4 節で言及する地図をたよりに構文は寺村（1983）以来、付帯状況を表す構文として扱われてきた。

の依存関係がある[2]。第二に、「原因」は必ず何かの原因であって、それなしにはあることを原因とみなすことはできない。「引き金」も同様である。節の間の奇妙な依存関係は名詞の持つこの性格に由来する。第三に、(1b) の文は一種の因果関係を表すものと解釈されるが、この理解は主に従属節内の名詞「原因」の語彙的意味内容に基づいている。この複文の意味理解には名詞が決定的な役割を果たしているのである。本発表ではこのような依存関係を含む「X が Y になって…」という形の文（および「X が Y となって…」「X が Y になり…」「X が Y となり…」というバリエーション）を考察対象とする。

第 2 節ではフレームの概念を導入し、Y の位置に生起する名詞の意味をフレームの観点から記述する。第 3 節ではこの構文における意味の統合のパターンを考察し、続く第 4 節では具体例に基づいて構文の意味を論じる。第 5 節はまとめである。

2. Y の位置の名詞

まず、「X が Y になって…」における Y の位置の名詞の性格について考察するにあたってフレームという概念を導入する。たとえば「人質」という名詞の意味を把握するには、その背景にある「ある人 A が、別の人 B に要求を受け入れさせるために B の大切な人 C を自らの支配下においておどす」という複合的な状況の知識を持っていなければならない。言語表現の理解に必要とされる、このような構造を持った知識のまとまりをフレームという（Fillmore 1982, 西村 2002）。このいわば《脅迫による取引》のフレームはさらにその背景として、それぞれの人が目的や利害を持ち時にはそれが互いに衝突することや、大切な人を守るために何かを犠牲にする場合があることなどの知識を前提としている。このようにフレームは自己完結的なものではなく、世界の全体的理解の中に埋め込まれたものである。

それぞれの語彙項目はフレームを喚起し、その一部を指す（プロファイルする）[3]。上のフレームにおける人物 A・B・C や A による要求といった概念は当のフレームから切り離して理解することはできない。このような特定のフレームを構成する諸概念はフレーム要素と呼ばれる。名詞「人質」は《脅迫による取引》のフレームを喚起し、そのフレーム要素である人物 C の役割をプロファイルすると言うことができる。名詞「引き金」は、事象 A が（多くの場合望ましくない）事象 B を引き起こすという一種の因果関係のフレームによって特徴づけられ、その中の事象 A に当たるフレーム要素をプロファイルする名詞と言える。そして引き金という概念はフレームの事例である個々の状況に対して相対的なものであるため、適用するにはフレーム要素である事象 B に当たるものが同定されていなくてはならない。上の例では「蕁麻疹が出た」という主節の内容によって事象 B が同定されている。名詞 Y と主節の間にはこのように特別な関係がある。

このような、あるフレームを喚起する名詞とそのフレーム要素を指定する文の部分との関係およびそうした関係を形作る名詞類は、いくつかの先行研究で記述されてきた。連体修飾の研究では、寺村（1975）によって「外の関係の相対的補充」と名付けられたものにおける主名詞と修飾部の関係がそれに当たる。寺村は連体修飾節のうち、主名詞が修飾節述語に対して補語の関係を結んでいるものを内の関係、そう

---

[2] この依存関係は、柏端（2017）で論じられている、ソクラテスが絶命したこととそれによりその妻クサンティッペが未亡人になったこととの間の関係と同種のものと見ることができる。柏端（2017: 167）は後者をソクラテスの死という出来事の 1 つの記述とし、別の出来事とは認めない立場を取っている。

[3] プロファイル（profile）は、指し示すこと（あるいは指し示された対象）の意味で用いられる Langacker（2008 他）の認知文法の用語である。言語表現の意味は、一定の百科事典的知識のまとまりを喚起し、その一部を指し示すという構造を持っていると考えられている。この百科事典的知識のまとまりはフレームに相当するものであり、認知文法の用語ではプロファイルに対しベース（base）と呼ばれる。西村（2002）も参照されたい。

でないものを外の関係と呼び、さらに後者のうち「火事が広がった原因」のような例を相対的補充、そのような関係を作る主名詞を相対性の名詞と呼んだ。本多（1996）は認知文法のベース・プロファイルと関連づけながら相対的補充を次のように規定している。

(4) ある連体修飾表現において名詞がその意味構造の内部（典型的には Langacker（1987）の言う基底部（base））に関係概念をもち、その関係を構成する項のうち主名詞の記述対象（Langacker（1987）の用語では特記部（profile））となっていないものを連体修飾部が補充している場合、その連体修飾部は主名詞に対して相対的補充の関係にある。（本多 1996: 114）

ここでの「関係概念」は本発表でフレームと呼んでいるものである。たとえば名詞「原因」の意味構造の中には〈原因〉と〈結果〉からなる因果関係の概念（＝フレーム）が含まれており、〈原因〉項がそのプロファイルである。「火事が広がった原因」では、名詞のプロファイルとなっていない〈結果〉項を連体修飾部が補充している。この特徴づけは「X が Y になって…」構文にもそのまま適用できるものである。なお (4) の規定は「太郎の友人」のような名詞句による連体修飾も含む点で寺村自身の規定より広いものとなっている（本多 1996: 115）。

西山（2003）はカキ料理構文と呼ばれる「X は、Y が Z だ」という文や「NP1 の NP2」に関連して、非飽和名詞という概念を提案している。非飽和名詞は「「X の」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延（extension）を決めることができず、意味的に充足していない名詞」と定義されている（西山 2003: 33）。たとえば「主役」について言えば、ある人が主役かどうかは「どの芝居（や映画）を問題にしているかを定めないかぎり、なんともいえない」（ibid.）。「主役」は非飽和名詞であり、「この芝居の主役」においてはそのパラメータの値が修飾要素によって埋められている。西山によれば「この芝居は、田村正和が主役だ」のようなカキ料理構文「X は、Y が Z だ」は、Z が非飽和名詞でそのパラメータの値を X が埋めるという関係が成り立っている場合に限り成立するという。西山は、それぞれの名詞が非飽和かどうか、何をパラメータに取るかといったことは（百科事典的知識から区別された）意味論的意味のレベルで定まることを強調する。しかし筆者の考えでは、この非飽和名詞とパラメータと呼ばれるものも、名詞の背景にある百科事典的知識つまりフレームの観点から分析するのが妥当である[4]。のちに非飽和名詞・パラメータと寺村の相対的補充との関連が山泉（2010, 2013）によって指摘されて以降、今井・西山（2012）や西川（2013）では非飽和名詞のパラメータの値を補充する手段として名詞句によるものと節によるものが認められている。

相対的補充の関係と非飽和名詞・パラメータの関係はそれぞれ別の文脈で議論されてきたものではあるが、本多（1996）や山泉（2010, 2013）の見解を踏まえれば、これらは同種のものだと言うことができる。すなわち、名詞の喚起するフレームの一部を文中の他の要素が指定するという関係である。本稿の「X が Y になって…」における名詞 Y と主節の関係も同じ関係の一種である。とはいえ、細部は構文ごとに異なる。以下では具体例を見ながらこの構文の意味の統合パターンを考察する。

3. 意味の統合

多くの場合、従属節が主節に対して持つ意味的関係は接続形式によって表される。例えば「熱が出たか

[4] このことは、先行研究で指摘されてきたカキ料理構文についての西山説への多数の反例（庵 1995, 菊地 1997, 山泉 2010, 三好 2017 他）からも支持される。氏家・田中（近刊）では「パラメータ補充」が柔軟性を示すことや、カキ料理構文の成否が文脈理解や百科事典的知識の影響を受けることなどを根拠に、非飽和名詞と呼ばれるものがフレームの観点から適切に分析できると論じた。

ら仕事を休んだ」においては接続助詞「から」が従属節事象が主節の行為の理由であることを表している。一方、「X が Y になって…」の構文は事情が異なっている。

(5) 死球が引き金になって、両チーム入り乱れての乱闘が起こった。 = (1a)

この文は、死球が乱闘を引き起こしたという関係を表していると理解されるが、この理解は「引き金」という名詞によるところが大きい。この構文では接続形式ではなく、従属節中の名詞の語彙的意味こそが文の意味の統合において決定的な役割を果たしているのである。以下、各要素が文全体の意味を形作るのにどのように関わっているかを考える。

まず、この構文の従属節述語「なる」はどのような働きをしているだろうか。変化を表す「なる」の用法の中には、「高校生になる」のような個体の属性の変化を表すものだけでなく、次のようなものもある。

(6) a. 敵をおびき寄せるために、お前がおとりになってくれ。
b. 殺人犯にはなりたくない。
c. 事件の現場になったマンション

あまり意識されることがないが、これらの「なる」は個体の属性の変化を表しているとは言いがたい。むしろ、フレームへの参与を表している。名詞「おとり」は特定のフレームを喚起しその中の特定の役割をプロファイルする。(6a) において「なる」が表しているのは、主語の指示対象がそのフレームに「おとり」の指定する役割で参与するという事態であると言える。b, c の例もフレームへの参与を表している。「X が Y になって…」構文の「なる」はこの用法の一例である。

そして、人が「おとりになる」すなわち「おとり」のフレームに参与するのは、そのフレームの事例である事態が生じた時である。同様に、人が殺人犯になるのは、殺人を犯した時であり、ある場所が事件の現場になるのは事件が起きた時である。(5) の従属節がフレームへの参与を表し、主節がそのフレームの事例である事態の一部を表す以上、最初に述べた通り、従属節事象と主節事象は時空間上別の事象ではないということになる。つまり、「X が Y になって…」構文におけるテ形接続の表す関係は、継起関係や原因・結果の関係ではなく、同じ 1 つの事象を別の観点から述べる 2 つの節の関係である。

以上のことを踏まえると、「X が Y になって…」という文の意味を、単一のフレームに文の各要素を重ね合わせたものとして捉えることができる。名詞 Y の喚起するフレームの 2 つの部分に対し、名詞句 X の表す事物と、主節の表す事象がそれぞれ重ね合わされる形で各部分の意味が統合されると言える。(5) では、「引き金」の喚起する「事象 A が（多くの場合望ましくない）事象 B を引き起こす」というフレームに対して、「死球」が事象 A に、そして乱闘の発生が事象 B に重ね合わされる。このように「X が Y になって…」構文は、名詞 Y の喚起するフレームの複数の部分に、文の各要素が特定の仕方で重ね合わされるという意味の統合パターンを持つ構文である。接続助詞などの文法的形式が意味の統合を主導する典型的な複文に対し、これは名詞主導の複文スキーマと言えるだろう。

なお、同じく名詞主導の複文スキーマとして、地図をたよりに構文と呼ばれる「X を Y に、…」という形式を持つ構文がある（村木 1983, 寺村 1983）。非飽和名詞との関連で研究が蓄積されているが（三宅 2000, 山泉 2013, 西垣内 2016, 氏家 2017, 2018）、これも同様にフレームの重ね合わせの観点から分析できる。

(7) a. 同力士は、「体力の限界」を理由に引退届を出した。
b. その男は私を相手に冗談ばかり言っていた。 （村木 1983）

以下では地図をたよりに構文との対比を考慮しながら、意味構造について詳しく検討する。

4. 重ね合わせと構文の意味

前節では意味の重ね合わせの概略を述べたが、実態はそれほど単純ではない。幅広い例を視野に入れると、名詞 Y の喚起するフレームに加えて、主節が総体として喚起するフレームおよびそのプロファイル、そしてこの構文スキーマが持つ抽象的な意味を考え合わせる必要があることが分かる。

現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて集めた例を見ると、Y の位置には多様な名詞が使われることがわかる。意味によって大まかに分類して示す[5]。

(8) a. きっかけ、引き金、原因、契機、発端、呼び水、誘い水、合図、転機、トリガー
b. もと、基準、基本、基盤、土台、テーマ、軸、前提、要件、モデル、下敷き
c. 動機、ヒント、決め手、励み、支え、ばね、追い風、肥やし
d. 妨げ、足かせ、ネック、障害、障壁、壁、デッドロック、バリアー、バリケード

次の例は Y に「ヒント」が用いられた例である。この名詞の喚起するフレームは概略「事物 A を行為者が認識することによって知的行為 B が成功しやすくなる」というものであり、フレーム要素である事物 A がプロファイルされる。この例では妻の一言が事物 A に、原稿を書く行為が知的行為 B に当たる。

(9) 妻の一言がヒントになって、原稿を一気に書き上げることができた。

興味深いことに、(10a) のように主節述語を無標の過去形にするときわめて不自然になる。それに対して、(10b) の地図をたよりに構文であれば問題はない。

(10) a. *妻の一言がヒントになって、原稿を書いた。
b. 妻の一言をヒントに（して）、原稿を書いた。

この対比は「X が Y になって、…」という構文スキーマ自体の持つ意味の積極的な関与を示唆している[6]。この構文は、事物 X と主節事象との関係を、「X によってしかじかの出来事が起こった」という（意志的行為ではなく）出来事としての因果関係と捉えて提示するものであると考えることができる。これは、従属節事象が非意志的である場合には主節事象も非意志的事象となりやすいというテ形接続の一般的な傾向に動機づけられているものと思われる。一方、地図をたよりに構文は典型的には意志的な行為として捉える構文である。

原稿を書くという意志的行為は「ヒント」の喚起するフレームには合致するが、出来事としての因果関係という構文スキーマの意味とは噛み合わない。 (10a) の不自然さはこのことに由来する。一方、(9) の主節「原稿を一気に書き上げることができた」は、原稿を書くという意志的行為のフレームを喚起しつつも、その行為の実現をプロファイルしていると分析できる。これにより、ヒントフレームの知的行為 B に一致する行為を喚起しながらも、節全体としてはその実現に焦点が当てられていることにより、出来事としての因果関係という捉え方とも合致する。

---

[5] 検索は中納言を用いて「が［名詞］になって、」「が［名詞］となって、」「が［名詞］になり、」「が［名詞］となり、」の 4 つの形式で行い、この構文の事例と認められないものは除外した（例:「母が病気になって、私は父といろいろ話す機会が増えた」）。

[6] 本発表の「構文の意味」の捉え方は基本的に認知文法（特に Langacker 2005）の使用基盤的な考えに基づくものである。詳しくは氏家（2019）で論じた。近年のフレーム意味論および FrameNet には、構文の喚起する抽象的なフレームも組み込まれている（Fillmore and Baker 2009, 小原 2019）。

事態の実現や維持を阻害する物を表す名詞が使われることも、出来事としての因果関係という構文の意味よく反映している。この場合、先ほどのケースとは逆に地図をたよりに構文は不可能である。

(11) a. 人手不足が足かせとなり、事業が計画通り進まない。
b. *人手不足を足かせに（して）、事業が計画通り進まない。

「足かせ」は、「事物 A の存在によって行為 B が妨げられる」というフレームを喚起する。この例では人手不足が事物 A に、事業を進めることが行為 B に重ね合わされている。そして主節「事業が計画通り進まない」は行為 B にあたる内容を喚起しながら、それが妨げられたことによる結果をプロファイルしている。一般に何らかのプロセスを妨げる阻害物は、そのプロセスに対していわば反-原因の関係にあり、プロセスの不成立に対しては原因の関係にある。(8d) の名詞はどれも何らかのプロセスの反-原因を指すものである。このように、主節が総体として喚起するフレームは名詞 Y のフレーム要素を精緻化し、なおかつそのプロファイルは構文の意味に沿ったものでなければならないのである。

また、コーパスの実例には、単独では因果関係を前景的に表すわけではない名詞が（やや拡張されて）使われる次のような例もある。その場合には、名詞の表すものが典型的に参与する因果的な事態のフレームとその中で指示対象が担う役割の知識に基づき、全体として「X によって何が起こったか」を述べる文として理解される。この種の例も、スキーマとしての構文の働きをよく示すものと言える。

(12) a. 飛び込む先は人間ですし、皆さん少しでもさわろうと寄ってきますから、それがクッションとなり、怪我はほとんどありません。（雑誌『Boon』）
b. 鼻呼吸の場合、鼻の部分がフィルターとなって、ウイルスや細菌が体内に入るのを防いでくれます。（『ウソ、ホント！？「からだの不思議」の雑学』）
c. 時々発作を起こして救急車で病院に運び込まれる以外、めったに外出はしない。だが目にしている周囲のすべてが堆肥となって、この狭い室内に閉じ込められた伯母を、自由に世間を動き回っている人よりもずっと物知りにしていた。（『東京ゴーストストーリー』）

5. おわりに

以上、「X が Y になって…」という表現をフレームの重ね合わせとして分析してきた。この構文は Y の位置の名詞の喚起するフレームの 2 つの要素に対し名詞句 X の表す事物と主節の表す事象がそれぞれ重ね合わされる形で意味が統合される名詞主導の複文スキーマであり、全体としては「X によってしかじかの出来事が起こった」という捉え方を表す。

因果関係は人間が経験を意味づける基本的な枠組みである。(8) にある「引き金」「ヒント」「足かせ」などの名詞の一つ一つは、われわれが持つ因果関係のきめ細かい認識を反映したものである。この構文はそうした詳細なフレームと結びついた名詞を用いて様々な関係を表し分けるための資源を提供している。

参考文献

Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In: Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm.* Seoul: Hanshin, 111–138.

Fillmore, Charles J. and Collin Baker (2009) A frames approach to semantic description. In: Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.) *The Oxford handbook of linguistic analysis.* Oxford: Oxford University Press.

本多啓 (1996)「「という」についての覚え書き」『駿河台大学論叢』12: 105–127.
庵功雄 (1995)「語彙的意味に基づく結束性について：名詞の項構造との関係から」大阪大学『現代日本語研究』2: 85–102.
今井邦彦・西山佑司（2012)『ことばの意味とはなんだろう』東京: 岩波書店.
柏端達也 (2017)『現代形而上学入門』東京: 勁草書房.
菊地康人 (1997)「「カキ料理は広島が本場だ」構文の成立条件」『広島大学日本語学科紀要』7: 89–107.
Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, vol. 1: *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
Langacker, Ronald W（2005）Construction grammars: cognitive, radical, and less so. In: Francisco J. Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel (eds.) *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*, 101-159. Mouton de Gruyter.
Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction.* Oxford: Oxford University Press.
三宅知宏 (1995)「～ナガラと～タママと～テ―付帯状況の表現―」宮島達夫・仁田義雄 (編)『日本語類義表現の文法（下） 複文・連文編』441–450, 東京: くろしお出版.
三宅知宏 (2000)「名詞の「飽和性」について」『国文鶴見』35: 89–79.［『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版, 2011 に再録］
三好伸芳 (2017)「カキ料理構文における「X の Z」の意味的性質」『日本語文法』17 (2) 81–97.
西垣内泰介 (2016)「指定文」および関連する構文の構造と派生」『言語研究』150: 137–171.
西川賢哉 (2013)「非飽和名詞を主名詞とする連体修飾構造の意味表示」西山佑司 (編)『名詞句の世界』29–50, 東京: ひつじ書房.
西村義樹 (2002)「換喩と文法現象」西村義樹 (編)『認知言語学I：事象構造』285–311, 東京: 東京大学出版会.
西山佑司 (2003)『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』東京: ひつじ書房.
仁田義雄 (1995)「シテ形接続をめぐって」仁田義雄 (編)『複文の研究: 上』87–126, 東京: くろしお出版.
小原京子（2019)「フレーム意味論」辻幸夫 (編)『認知言語学大事典』176–183, 東京: 朝倉書店.
寺村秀夫 (1975)「連体修飾のシンタクスと意味―その 1―」『日本語・日本文化』4: 大阪外国語大学留学生別科.［寺村 (1992) に再録］
寺村秀夫 (1983)「「付帯状況」表現の成立の条件―「X ヲ Y ニ……スル」という文型をめぐって―」『日本語学』2 (10)［寺村 (1992) に再録］
寺村秀夫 (1992)『寺村秀夫論文集 1 日本語文法編』 東京: くろしお出版.
氏家啓吾 (2017)「「地図をたよりに」構文と非飽和名詞」『東京大学言語学論集』38: 287–301.
氏家啓吾 (2018)「ネットワークとしての文法知識―「地図をたよりに」構文の記述を通して―」『東京大学言語学論集』40: 251–273.
氏家啓吾 (2019) 「語彙項目と構文の相互作用 ： 認知文法における skewing の批判的検討を通して」『東京大学言語学論集』41: 315–328.
氏家啓吾・田中太一 (近刊)「参照点とメタ概念化」『東京大学言語学論集』43.
山泉実 (2010)「節による非飽和名詞（句）のパラメータの補充」東京大学大学院総合文化研究科博士論文.
山泉実 (2013)「非飽和名詞とそのパラメータの値」西山佑司 (編)『名詞句の世界』11–27. 東京: ひつじ書房.